令和５（2023）年度
学修の成果と課題

【ディプロマ・ポリシー（DP）の達成度調査の方法】

本学では、ディプロマ・ポリシーの達成度を調査し、学修成果の可視化に繋ぐことを考え、1 年次前期・後期、2 年次前期・後期のそれぞれの終了時において、ディプロマ・ポリシーとして「きづく」「かかわる」「みがく」の目指す姿を示し、その姿に対して、具体的な項目としてそれぞれ 10 項目を設けている。「きづく」「かかわる」「みがく」の目指す姿は、その学期で開講されている科目のシラバス(教育目的)にも示しており、授業計画表の項目及び内容とも関連していることを示している。

学生自身による判断ではあるが、この調査結果を基に、今後は科目間や教員間で、ディプロマ・ポリシーを達成するための検討が必要であると考える。また、学生自身が学年・学期ごとの達成状況を自己評価することで、どの要素が十分学べているのか、どの要素が足りないのかを把握し、今後の学修を自ら検討する手立てとなると考える。

今回の調査では、それぞれの具体的な項目について 4 件法による回答を得た。

幼保コース　学修成果（ディプロマ・ポリシー達成度）の成果と課題
【22・23 年次生】

◆１年次前期

【結果】

１年次前期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」（3.2 点），「かかわる」（3.2 点），「みがく」（3.18 点）であった。

「きづく」では、最も高い項目は、「こどもを対象とした話し方、表情、動きなど保育を行う上での基本的な表現の技術を身につけることの大切さにきづく」（3.3 点）であり、次に「こどもの視点に立った安全管理について知ることができる」（3.3 点）、「こどもの権利や多様な個性を尊重する姿勢をもち、こどもの支援を想像しながら、様々なこどもの姿を感じとることができる」（3.2 点）であった。また、最も低い項目は、「情報教育機器の活用に係る基礎知識を習得することができる」（3.0 点）であり、次に「教育課程および保育の計画と評価の編成に関する基礎理論・知識を理解することができる」（3.1 点）、「社会福祉、子ども家庭福祉につながる制度を知ることができる」（3.1 点）であった。

「かかわる」では、最も高い項目は、「こどもにとっての遊びは、学びであることを理解し、遊びがもたらす子どもへの影響を考えることができる」（3.3 点）であり、次に「集団において、与えられた役割をこなそうと努力することができる」（3.3 点）、「こどもの主体性について考えることができる」、「こどもの発育・発達に応じた様々なあそびを考えることができる」（3.2 点）であった。また、最も低い項目は、「多文化共生とＳＤＧｓを理解し、取り組みを考えることができる」、「発育・発達のプロセスを知ることができる」（3.1 点）、次に、「保育内容の５領域を基に、遊びを考えることができる」、「こどもの遊びに用いる様々な遊具や用具、身近にある素材、保育教材・児童文化財の特性を理解する」、「こどもの感性を養うための環境構成に必要となる知識を習得する」（3.2 点）であった。

「みがく」では、最も高い項目は、「挨拶，言葉遣い，服装，他の人への接し方など、社会人としての基本的な事項を身につけることができている」（3.3 点）であり、次に「保育者の役割を理解した上で、自身の目指す保育者像を描くことができる」（3.3 点）、「こどもの遊びに用いる様々な遊具や用具、身近にある素材、保育教材・児童文化財がどのように活用されているか視野を広げることができる」（3.2 点）であった。また、最も低い項目は、「カリキュラムマネジメントの基礎的な考え方を理解している」（3.0 点）であり、次に「保育・教育・福祉という言葉がどのように使われているか探求することができる」（3.1 点）、「自らの強みとなる保育技術をみつけ、目標を持って取り組むことができる」（3.2 点）であった。

【成果と課題】

全ての項目において、概ね良好な値となっている。学生の自己評価であるために、あくまでも学生の主観によるものとなるが、前期カリキュラムを通して、建学の理念を基盤に据え、保育士養成課程・幼稚園教諭・養護教諭・小学校教諭課程の学びのスタート時期のタイミングで、概ね良好な値として能力を獲得できていることが示唆できる。

「きづく」-⑤⑦⑨(3.3 点)からは、1 年次前期科目から“こども”についての学びを知ることを特徴とする科目を多く構成していることで、“こども理解”への思いが涵養されていることが確認できた。

保育・幼児教育を学びたいと入学した初期段階での専門的な学びから、すでに保育者として歩むための下地作りや保育者になることに向けて一歩踏み出した実感を得ていることについてが読み取れる。“こどもの最善の利益”を第一に考え行動でき、保護者ら家庭から信頼され、地域の課題に貢献できる保育・幼児教育に携わる学生個々の学修の進捗に期待したい。

「きづく」-④(3.0 点)に関しては、若干低い値を示しているが、情報機器の活用に関しては、Society5.0 への対応を目指した GIGA スクール構想から、やがてくる DX 時代の教育者となっていくための重要な学びの位置づけとなる重要科目となるため、後期、さらに次年度以降の学修を通して自己評価が上昇することに期待する。

「きづく」-②⑧(3.1 点)は、保育・幼児教育をデザインすることや福祉に関する制度について、保育者としての職務内容や責任を理解できる重要な学びを提供している科目の評価となっている。座学における知識向上に期待したいが、受講生らにとっては、複数科目で網羅できない単独科目の授業での学びであったため、低い値となったことが影響していると考えられる。教育課程の仕組みや社会福祉の動向を把握することは、保育・幼児教育者になる者としては避けられない。これらについては、更なる専門知識の獲得ができるよう、後期以降の授業にて、関連する内容の理解度を注視しておく必要がある。

「かかわる」-①⑨(3.3 点)⑧⑩(3.2 点)は、半期における学びの手応えが持てなかった学生は見られない。入学して半年の段階にもかかわらず、幼児教育・保育学の学問域に肯定的な評価基準を選択した学生の割合が多いことが読み取れる。“こども”という言葉から切り離すことのできない“あそび”“発達”について、こどもの“主体性”を大切にする考えが広がっている昨今の現場の現状を理解しようとしている点、他者との協働する“チーム学校・チーム保育”についても、受講者らは理解を得ていることが確認できた。

「かかわる」-②③(3.1 点)④⑥⑦(3.2 点)については、こどもの健やかな心身の成長を支える保育者の専門知識・技術獲得の実感を得ていることが読み取れる。一方で、学びの手応えが今一歩と評価する値も出現している。後期・更に次年度以降の科目にて、関連する内容を追加し、理解を促していく必要があるといえる。必要とされる幼児教育・保育学の専門知見の修得と、それらの専門知見が個々のこども理解や支援に、どのように役立つのか興味関心を持って学んでいってくれることを期待する。

「みがく」-①(3.2 点)⑧⑩ (3.3 点) から、ほとんどの学生の評価から、保育・幼児教育の基盤となる人間性、礼法マナーや教養、現場で活かす素養、技術や視野について自らの変化が認められたことが読み取れた。一方で免許・資格取得に必要となる科目の学びの成果にも注目したい。

「みがく」-②(3.2 点)③ (3.1 点) ⑦(3.0 点)の自己評価は、保育の質を高めるための手立てを学ぶ授業の難しさが顕著に現れていることが窺え、カリキュラムの配置による影響も考えられる。カリキュラムの計画的実行については、シラバスや教授内容の精査とさらなる精緻化が必要である。大多数の学生の高い評価値をみると、１年次前期とはいえ、幼児教育・保育学の理論と実践を順調に行われていることが確認できた。各担当科目の授業で手分けをして、保育の省察を通した“理論と実践の往還”の重要性を伝えることができた成果であると解釈したい。

◆1 年次後期

【結果】

1年次後期終了後におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、［きづく］（3.4点）、「かかわる」（3.4点）、「みがく」（3.4点）であった。

「きづく」では、最も高い項目は、「③個々のこどもの特性や状況に考慮した接し方の方法や対応する知識を習得することができる」（3.4 点）、「⑧不適切な養育、貧困、虐待などの『子ども家庭福祉』につながる現状と課題に向き合うことができる」（3.4 点）、「⑩保育者としての気づきを感じとり、様々なこどもの姿を捉えることができる」（3.4点）でった。

また、最も低い項目は、「⑦こどもの権利(最善の利益)について自分の言葉で説明ができる」（3.0 点）であり、次に、「①『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の内容をふまえ、保育・教育の基本的な考え方をもとに、これまで履修した領域の保育内容を具体的に活用することができる」（3.2点）であった。

「かかわる」では、最も高い項目は、「①他者と共同して指導案作成をすることができる」（3.4点）であり、次に、「④集団において、与えられた役割をこなすことができる」（3.4 点）、「③集団において、他者と協力して課題を解決する方法を考えることができる」（3.4点）であった。

また、最も低い項目は、「②情報教育機器の活用に係る基礎理論・知識を習得し、活用場面をイメージすることができる」（3.4 点）であり、次に、「⑥保育内容の指導法に係る基礎理論・知識を習得することができる」（3.3 点）、「⑨こどもの心身の発達やこどもを取り巻く環境等と、『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』に示される保育の内容をふまえて、こどもの生活と遊びにおける体験と保育の環境を考えることができる」（3.3点）であった。

「みがく」では、最も高い項目は、「①他者の意見やアドバイスに耳を傾け、次の課題に取り組むことができる」（3.5 点）であり、次に、「⑤自分の目指す保育者像を描き、保育者になるための目標を立て努力する」（3.4点）　であり、次に、「⑩目指す保育者像に向けて自身の特長や課題にきづくことができる」（3.4点）であった。

また、最も低い項目は、「④こどもの心身の健康や発達の理解を更に深めるとともに、保育の内容と方法について学び、保育技術の基本を身につける」（3.3 点）であり、次に、「⑦保育を仕事にしていくための手立てを整理することができる」（3.3 点）であり、次に、「⑧保育者となるために学修の中から自律的な生活習慣や職業倫理を自覚することができる」（3.3 点）と、「⑨自らの強みとなる保育技術をみつけ、更なる目標を持って取り組むことができる」（3.3 点）であった。

【成果と課題】

ディプロマ・ポリシー達成度の自己評価を通じて、1 年次後期カリキュラム修了、すなわち入学して 1 年間で教育目標や学位授与方針に掲げた各要素を、学生が「どの程度達成できたのか」を把握していきたい。全項目において概ね良好な値が出ており、本学が掲げているディプロマ・ポリシー達成に向けて順調に学んでいることが確認できた。

「きづく」−③⑩⑧（3.4 点）は、一人一人の子どもに寄り添うことの重要さを学べたことが読み取れる。さらに、不適切な養育、貧困、虐待など、子どもと家庭の現状と課題に向き合うことに関心を持っていることも読み取れる。

一方で、「きづく」-⑦（3.0 点）については、こどもの権利(最善の利益)について自分の言葉で説明することに難しさを抱えた学生も一定数見られた。「こどもの well-being」は、保育の基盤となる重要な理念となるため、自らの保育観を深めていくためにも、常に考え続けていって欲しいと期待する。

「きづく」①（3.2 点）「教育要領、保育指針の基本的な考え方をもとに、保育内容を具体的に活用することができる」については、各保育内容指導法を同時期に開講していることで、科目間の相互関係が学生の理解を助けあえると想定できるも、一定数成果が低い結果がでた。学びの実感は、個人差があると考えられるが、“保育をみる視点”と“実践方法のイメージ”が描きづらい結果は、今後の保育実践にも影響が出るため、理解が得られるような教授法やカリキュラム編成を考慮したい。学生には、次年度の学修成果の伸びに期待したい。

「かかわる」−①③④（3.4 点）は、「かかわる」に挙げられる保育の資質・能力を試す授業が並ぶ。学生らが目指す保育者に近づいていく可能性に注目できる観点である。他者と共同して保育をイメージし“チーム学校・チーム保育”において、与えられた役割をこなし、協調性を持って保育に携わる構えが身についたことが読み取れる。

「かかわる」−⑤（3.2 点）の評価であるが、保育現場での情報教育機器の活用法については、今後更なる理論・知識の習得を目指し、保育内での活用場面をイメージできるレベルまで備えてほしいと考える。ＩＣＴの活用能力に関しては、操作のスキルアップを希望する見方もあるが、本来は、教育や保育の現場で保育者が目的とする実践を、ＩＣＴ機能を活かして実現することである。

ＩＣＴ（情報通信技術）活用の促進に向けた教育職員免許法の改正に伴って、令和４（2022）年度から、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」が教職課程に新たに加わることになった。本学でも、２年次にＩＣＴを活用した授業が控えている。実践・情報活用能力の育成をスムーズに展開するために、１年次の学習成果を確実に上げる手立ての検討が必要だ。

「かかわる」⑥⑨（3.3 点）の結果から、“教育要領”や“保育指針”の理念を実現するための必要な方策は、1 年次の学びにおいてある程度理解をしておいてほしいと考える。

1 年次終了時点で実習体験が始まる。実習園の教育課程や保育の全体的な計画を元に行われている実際の保育に立ち入らせていただくことからも、“生活と遊びにおける子どもの姿”と“環境構成”についての理解を高めながら、学生の実践力を高めていきたいと考える。

「みがく」-①（3.5 点）⑤⑩（3.4 点）は、目指す保育者像をイメージし、自分自身が持つ目標に向かってチャレンジした結果が見て取れる項目である。「きづく」内の平均を上回る高評価が出現しており、本学のカリキュラム・ポリシーに掲げる伸展科目から、保育者になるために必要な資質・能力が育まれていることが確認できる。

「みがく」−④⑦⑧⑨（3.3 点）については、高評価がかなり高い水準だったことが影響しているせいか、低い評価として挙げられているが、決して低いわけではないが、一定数の低評価者の数値を概観する必要がある。

この項目を通じ大半の学生は、初年次から、出口（就職）を意識していることが示唆される。入学初期における教育のナビゲーション通りに効率的に学ぶ道筋を見つけ、順調に保育を仕事にして

いくための手立てを整理し、職業倫理を自覚し、自らの強みとなる保育技術をみつけ、更なる目標を持って取り組むことを認識できている学生は、確かに多く存在する。だが、入学して１年間で保育内容と保育方法を学び、保育技術の基本を身についている兆しはあるも、２年間で卒業をする短期大学の特徴を受け止めることができなかった学生についても一定数存在する。自己実現の一歩をさらに踏みだすための手立てやサポートが必要である結果が見えた。

１年次後期に関しては、学修成果を可視化する上では、他のアセスメント指標と組み合わせて用いての評価が必要となる。特に、技術面については、実習の成績評価や他の科目における評価などによって測定することも必須であろう。保育の技能は現場での実習経験が大きく影響するため、保育実習や幼稚園教育実習が行われている時期に大きく上昇すると予測される。これらの複数の指標をいかに計画的に用いるのかが、「個性の伸展」を図れるデータとなるため、今後の分析における検討課題となる。

◆２年次前期

【結果】

２年次前期終了後におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」（3.3 点）、「かかわる」（3.3 点）、「みがく」（3.3 点）であった。

「きづく」では、最も高い項目は、「⑦観察・参加・部分実習を通じて、保育者の関わりを理解して、身につけた保育技術を実践することができる」（3.4 点）であり、次に 「⑩保育者としての気づきを意識しようとしながら、一人ひとりのこどもの姿を捉えることができる」（3.4 点）、「⑥一人一人のこどもや利用者に発達や個性を踏まえた適切なかかわりができる」（3.3 点）であった。また、最も低い項目は、「⑨社会的な出来事に関心を持ち、子どもや保護者と向き合う際の教養を持つことができている」（3.2 点）であり、次に「②こどもを理解するために必要な心理・発達論的基礎知識について知ることができる」（3.2 点）、「④こども、障がい児（者）、社会的養護を必要とするこども、家庭と対象にあわせた支援のあり方を考える」（3.3 点）であった。

「かかわる」では、最も高い項目は、「③気軽にこどもと顔を合わせて、親しみを持った態度で接することができる」（3.5 点）であり、次に「⑤こどもの反応をみながら保育を展開することができる」（3.4 点）、「②こどもの発達段階を踏まえて、生活やあそびの援助をすることができる」（3.3 点）であった。また、最も低い項目は、「④情報機器を様々な場面に応じて活用することができる」（3.1 点）であり、次に「⑨『個別の教育支援計画』、『個別の指導計画』を基に、こどもと関わることができる」（3.2 点）、「①他者と共同して保育を企画・運営・展開することができる」（3.2 点）であった。

「みがく」では、最も高い項目は、「③他者の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得て、課題に取り組むことができる」（3.5 点）であり、次に「⑦自分の目指す保育者像を明らかにし、保育者の専門性を高めるために努力することができる」（3.3 点）、「⑧保育者としての気づきを増やす、こどもへの援助方法の探究を続けるために柔軟な感性と視野をそなえられるように努力する」（3.3 点）であった。また、最も低い項目は、「②指導場面で活用するための教材を開発することができる」（3.1 点）であり、次に「⑥権利擁護、社会的養護への視点をもった支援を考えること

ができる」（3.1 点）、「⑨家庭および地域の関係機関、職員の連携を図り、協働するための保育者の立場を理解し、行動に移す準備をすることができる」（3.2 点）であった。

【成果と課題】

本学の教育目的・目標の達成に向けて、学生の学習の成果の２年次前期カリキュラム修了のタイミングでの学生の自己評価であるが、全ての項目において概ね良好な値として能力を獲得できている結果となった。

「きづく」−⑩⑦(3.4 点) ⑤(3.3 点)では、１年目の学習履歴を実地で試す実習成果の自己点検を含む項目が並ぶ中で、実習の自己評価と捉えることができる３項目が並んだ。

自分自身の実習状況を評価したと想定できる中で、一定程度以上の成果を獲得していることが示された。保育者に必要な資質能力について、“一人一人のこどもや利用者の理解と関わり”や“身につけた保育実践を実践する”“保育者としての気づきを意識しようとしながらこどもの姿を捉える”の項目から、自分自身の現在の状況を評価した到達度を測ったことで、保育者への確たる思いに自信をつけていってほしい。１年間半の座学や演習の理論学習と実習体験を通して、ある一定程度以上の成果を獲得していることが示された。

「きづく」−②(3.2 点)④(3.3 点)⑨(3.2 点)では、２年次は、保育者を目指す過程で、更なる専門的知識を学ぶステージとなる。２年次の学びは座学の難易度に向き合うことになるが、どのようなこども・保護者にも対応できるために、心理学、特別支援教育学を基盤に、発達の連続性と多様性を理解することが重要となる。各項目は、平均値よりやや低いが、学びを積み上げている段階であるとも受け取れる。

「かかわる」−③(3.5 点)⑤(3.4 点)②(3.3 点)も、「きづく」−⑤(3.3 点)⑦(3.4 点)⑩(3.4 点)同様の実習時の自己評価となる項目が並び、平均値より高い結果が見られる。“こどもと顔を合わせ、親しみを持った態度で接する”“こどもの反応をみつつ保育を展開する”“こどもの発達段階を踏まえて、生活やあそびの援助をする”の自己評価からも、理論と技術の往還体験を複数回こなし保育者を目指す上での手応えを感じていることが示唆された。

「かかわる」−①(3.2 点)は、平均値が若干下回るものの、授業時のグループ活動等で、他者の意見やアドバイスに耳を傾け理解や協力を得ながら、自らの保育観を涵養できたことへの評価ができたと推測する。２年次生は、新型コロナウィルス感染症によるこれまでの行事や社会的な学習として取り組めた学びが休止せざるを得ず、体験的な学習がこれまでと比較して少なく、過去の学生と比較すると実践的な学びあいの機会が少なかったことも推察されるが、後期科目以降の授業においても、他者との共同活動の機会を多く持ち、自らの個性を現場でどう活かせるかをイメージして、集団としてどのような関わりが大切かについての理解を深め、自らが目指す保育者のあり方を探求していってほしい。

「かかわる」-④(3.0 点)は、情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法について、やや不得手な学生が一定数いることが明らかになった。デジタル化によってＩＣＴ活用のスキルがいまや保育者・教員にも必須となるため、保育・教育メディアに関する諸理論や、ＩＣＴの活用法、情報活用能力を育む指導の要点など継続した学びに期待したい。

「みがく」−③(3.5 点)⑦⑧(3.3 点)の高い値は、保育に関しての理解、子どもに関しての理解を深めた１年次の授業において取組んだ、学びを通した学習成果の高まりが現れたと推察できる。課

題探求や各実習での実践を通した体験的な学びにより、２年次前期開講科目の学習成果が更に高められたことが推察される。保育者を目指す学生の姿は、実習後も維持されている。保育者として羽ばたく姿を見られることを楽しみにしたい。

「みがく」-②(3.1 点)の教材を開発と、⑥(3.1 点)⑨(3.2 点)は、“社会的養護への視点をもった支援を考える”や“家庭および地域の関係機関、職員の連携を図り、協働するための保育者の立場を理解し、行動に移す準備をする”は、平均より若干下回った値となった。

実習は、社会の中に入って行う学びである。従ってこの時期の学生には、“保育職・社会の一員”である自覚が要求される。実習に出かけ、保育者や施設の職員や子どもだけではなく、保護者や保育者以外の存在にも気づいたであろう。そこには、多様な人々のネットワークが築かれている。短期間とはいえ社会に入り、社会の一員になることは大いに意味がある。社会情勢の変化や保育者が関わる家庭のニーズも多様であるが、保育施設の有り様と社会的責任を今後の学びを通して、さまざまな状況にも関心を向けられるようになって欲しい。

◆２年次後期

【結果】

２年次後期終了後におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」（3.4 点）、「かかわる」（3.4 点）、「みがく」（3.3 点）であった。

「きづく」では、最も高い項目は、「③保育・教育の理念と内容を理解するとともに、保育のイメージを持つことができる」（3.4 点）であり、次に、「①保育職・教職の意義や保育者の役割、職務内容について理解することができている」（3.4 点）、「②望ましい価値観・倫理観と判断力を身に付け、保育者としての責任を持った行動ができる（こどもに対する責務とは何かについて理解し、行動に移す方法を知っている）」（3.4 点）、「⑨こどもの育ち、子育て、地域に関する知識を社会に貢献しようとする気持ちを持ち、実践をイメージすることができる」（3.4 点）であった。

また、最も低い項目は「④保育・教育に関する歴史・思想についての基礎理論・知識を習得することができている」（3.3 点）であり、次に、「⑤保育・教育の社会的・制度的理解に必要な基礎理論・知識を習得することができている」（3.3 点）であり、次に、「⑦学級集団の形成に必要な基礎理論・知識を習得し、こどもとの間に信頼関係を築き、クラスの集団を把握したクラス運営を行う方法を知っている」（3.3 点）であった。

「かかわる」では、最も高い項目は、「④こどもの声を受け止め、公平で受容的な態度で接することができる」（3.5 点）87.0%であり、次に、「⑦的確な話し方、表情、動きなど保育を行う上での基本的な表現の技術を身につけることができている」（3.4 点） 85.8%であり、次に、「③気軽にこどもや保護者と顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど親しみを持った態度で接することができる」（3.4 点）であった。

また、最も低い項目は、「②こどもの発達段階を考慮して、適切に接することができるようになるとともに、家庭や地域の実態にふれながら、知識・技術・判断力を習得することができる」（3.3 点）と、「⑧集団において、率先して自らの役割を見つけたり、与えられたりする役割をきちんとこなすことができている」（3.3 点）であり、次に、「①家庭や地域との連携・協力の重要

性を理解することができ、連携・協働する方法をイメージすることができる」（3.4 点）と、「⑩こどもの発育・発達やこどもを取り巻く環境の理解に努めながら、指導計画の中で保育者として臨機応変にかかわることができる」（3.4 点）であった。

「みがく」では、最も高い項目は、「⑤集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる」（3.5 点）であり、次に、「③自己の課題を認識し、その解決に向けて、学び続ける姿勢を持つことができている」（3.4 点）であり、次に、「④保育・教育に関する新たな課題に関心を持ち、自分なりに意見を持つことができている」（3.4 点）であった。

また、最も低い項目は、「⑦こどもの直接的な体験を基盤としたＩＣＴの活用を踏まえ、主体的にＩＣＴを活用し、保育を改善したり、保育データを整理、分析したりすることができるように努力する」（3.2 点）であり、次に、「①教材を活用して指導を実施し、その指導を評価することで、次のステップを見出すことができている」（3.3 点）であり、次に、「②こどもの発達に応じた教材を開発することができている」（3.3 点）と、「⑧自らの保育・教育実践を振り返り、成長の足跡や課題を『履修カルテ』に記述するなど、実践と考察のＰＤＣＡサイクルを活用して、自分を磨くことができる」（3.3 点）であった。

【成果と課題】

ディプロマ・ポリシー達成度の自己評価を通じて教育成果を２年次後期カリキュラム修了、すなわち卒業時に教育目標や学位授与方針に掲げた各要素を学生が「どの程度達成できたのか」を把握する。全項目において概ね良好な値が出ており、本学が掲げたディプロマ・ポリシー達成度を卒業までにほとんどの学生が、達成できたことが示唆される。

「きづく」−③①(3.4 点)②⑨(3.4 点)では、保育・教育の理念と内容を理解し、保育をイメージする力、保育者の役割や職務内容の理解、保育者としての価値観・倫理観と判断力を身に付け、使命感と向上心を持って自身の気づきを働かせたことができていたと考えられる。

また、「子育ち・子育て・地域に関する知識」を社会に貢献しようとする気持ちを持ち実践イメージを持てたことも、こどもの多様性を理解することができていたことへの評価が示せたのであろう。すなわち、「きづく」の、「保育者としての基本的な知識・技術を習得し、保育者自身の気づきを働かせながら、こどもの多様性を理解することができる」が達成できた学生の結果が確認できた。

一方、「きづく」−④(3.3 点)⑦(3.3 点)⑤(3.3 点)においては、点数が下位として構成されてはいるが、保育・教育に関する歴史・思想や学級経営、保育・教育の社会的・制度的理解に必要な基礎理論等においての理解を深める手がかりは、ほとんどの学生が掴めていることも確認できる。２年間で修得した知識・技能・態度等を活用して実践に繋げようとする学生の姿は、養成校レベルにおいて十分に保育者の資質能力を備えることができたと評価して良いだろう。

この内容について平均値に届かなかった学生については、現場に行ってからも学びを継続できるため、これまで身につけた知識や技術を活用しながら、実践を通じて研鑽を積む事に期待したい。

「かかわる」−④(3.5 点)⑦③(3.4 点)では、卒業後の実践に向けて、対応するこどもや保護者に保育者の専門的技術が身につき、心構えができたことが読み取れる。しかも評価が高く頼もしい。

一方、かかわる−②⑧（3.3 点）①⑩（3.4 点）は、下位グループではあるも、保育者として臨機応変にかかわること、家庭や地域との連携・協力をイメージする力は平均値を示しているため、決

して低い数値ではない。家庭や地域の実態にふれながら、知識・技術・判断力を活かしながら、集団で行う保育において率先して自らの役割を見つける協調性については、短期間での実習体験だけであるので、学生が手応えをつかむのは困難ではあろうが、努力した点は確認ができる。

２年次後期の「かかわる」のタイトルになっている「こどもの発育・発達や、こどもを取り巻く環境理解に努めながら、指導計画の中で保育者として臨機応変にかかわることができる」を、学生らが達成できたと実感を持てたことは、十分評価できる。しかし、平均評価点に達しなかった学生が一定数いる結果からは、自信を持って卒業したと実感が持てるように、評価項目の計画的実行のねらいを適正な位置に修正する等の精査とさらなる精緻化が必要である。

「みがく」−⑤（3.5 点）③④（3.4 点）は、幼児教育・保育の世界は、他者と協力して課題に取り組む性質が大きいことに十分理解を得られていることが読み取れた。また、自己の課題を認識し、その解決に向けて学び続ける姿勢を持つ構えや、新たな課題に関心を持ち、自分なりに意見を持つことにおいても、自分自身で未来への灯りを照らす努力ができたと読み取れる。

「みがく」−⑦（3.2 点）①（3.3 点）②⑧（3.3 点）は、ＩＣＴ活用し保育データを整理する力、教材開発と活用方法を模索することは、今後の実践力に期待したい。現場に出ると、自らの保育・教育実践を振り返る場面が増えるが、PDCA サイクルの活用し保育力を磨くことも継続して力をつけてほしい。

２年次後期の「みがく」のタイトル「保育者として個性をみがき続けるために、探究したいテーマ(生涯にわたる課題)を持ち続けることができる」は、８割を超える学生が達成している。本学の建学の精神“個性の伸展による人生練磨”の下に、学生一人一人がそれぞれの個性を活かしながら、保育者としての専門性を高めることができた教育効果が現れた評価は、養成校側も自信がつく。ただ、「かかわる」と同様に、平均値に達しない数名の学生も自信を持って卒業したと実感が持てるように、評価項目の計画的実行のねらいを適正な位置に修正する等の精査とさらなる精緻化が必要である。

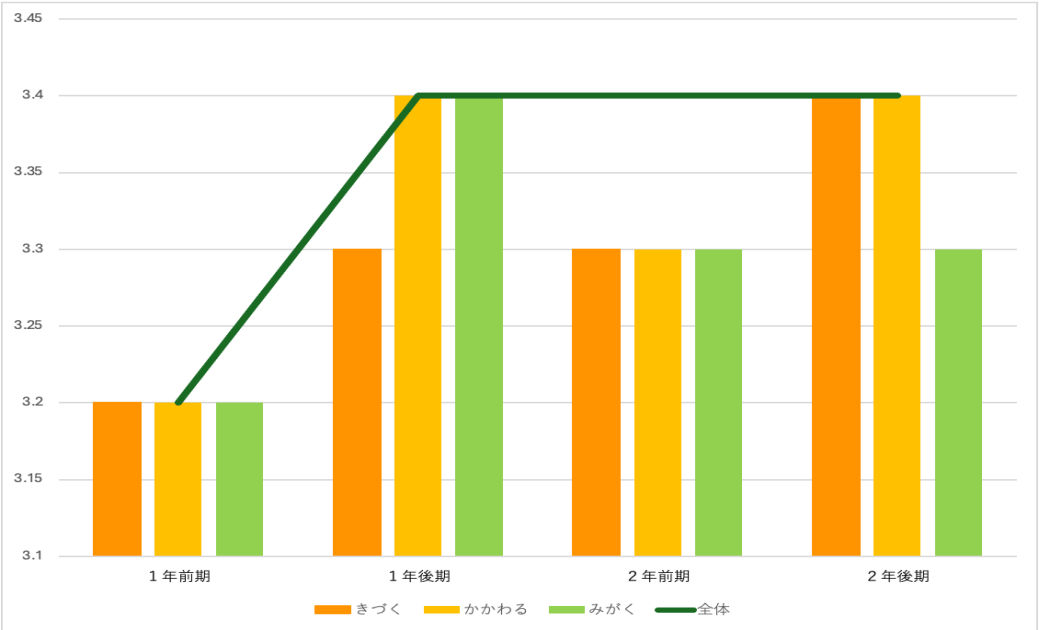

図１　令和５（2023）年度　【幼保コース】ディプロマ・ポリシー達成度推移

養護コース　学修成果（ディプロマ・ポリシー達成度）の成果と課題】
【22 年次生】

◆１年次前期

【結果】

１年次前期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度を調査した結果、それぞれの目指す姿の平均値は、4 点満点中「きづく」3.4 点（84.1%）、「かかわる」3.2 点（80.5%）、「みがく」3.3 点（81.4%）であり、全体としては 3.3 点（80.7%）の達成度が示された。

「きづく」で最も高い評価を示したのは、「②一人一人の生命や身体の安全を確保するとともに、個性や思いを大切にする気持ちをもっている」（3.7 点）であり、次に「③社会にある人権問題、学校における人権教育の必要性等について理解している」（3.5 点）となった。反対に、「⑧健康診断の内容と方法について理解している」（3.2 点）で平均値を下回る結果となっている。

「かかわる」では、「②社会に出るために必要な挨拶や言葉遣い、身だしなみを身につけている」（3.5 点）で最も高い値を示したが、「⑧学校保健委員会等、保健組織活動の意義や目的、内容等を理解している」・「⑨学校環境衛生の内容と方法について理解している」・「⑩学習指導要領に示された各教科等の保健に関する内容を理解している」では 3.1 点とやや低い値となった。

「みがく」では、「②養護教諭として必要な資質・能力を身につけるために、学ぶ意欲と志をもち、自ら学んでいる」・「③自分の目指す養護教諭像または養護教諭の免許を有した保育者像を描くことができる」・「⑨ICT 活用や情報モラル等に関する指導の重要性を理解している」の 3 項目で 3.4 点という値を示したが、「⑥保健室が健康情報センターとしての役割を果たすことや保健室で扱う健康情報について理解している」において 3.1 点という結果となった。

【成果と課題】

まず、「きづく」－②（3.7 点）、③（3.5 点）について高く評価している半面、⑧の健康診断については３．２点とやや低い評価となっていることから、こどもの生命や健康・安全を保障すること、そして、子どもの個性や気持ちを尊重すること等、学生が教育者として必要不可欠な人権感覚を持っていることを示唆する結果となったものと考えられる。

一方で、学校安全に関わる危機管理能力や危機管理体制については、保育士科目の「こどもの保健」や「健康と安全」で扱う学習内容をベースに、養護教諭としての専門性を深める学習体系を整備し、今後の学修の中で実践とともに深めてほしい項目と言える。

近年、こどもの事件・事故に関連する報道は園や学校内外を問わず世間から注視されており、学生からも高い関心が寄せられる事項のひとつである。こどもの権利と同様に、こどもの安全を守ることが保育者・教育者としての務めであると意識している結果、危機管理に関する具体的な場面を認識できていないと判断している可能性もある。

次に「かかわる」の「②社会に出るために必要な挨拶や言葉遣い、身だしなみを身につけている」（3.5 点）の結果より、入学以降、実習生としての心構えを徐々に意識しながら姿勢を整えていることがわかる。ただし、⑧・⑨・⑩では、養護教諭としての専門知識を習得した上で児童生徒等とどのように関わっていくかが焦点となる内容であるが、「きづく」－⑧の健康診断と同様、授業評価アンケートでも理解度が低いことが示されているため、実際にその職務を通して児童生徒等と関

わる以前に、その職務に関する基礎知識の習得で課題がある可能性もあると推測される。これらの内容には授業時数を多く割り当てているものの、効果的に学習効果が反映できていない結果から、再度、教授方法のあり方を模索している段階である。

最後に、「みがく」では、②③⑨（3.4 点）の数値より、自分が目指す養護教諭像や養護教諭について学ぶことに高い意欲を持っていることが伺える。本学では、幼稚園教諭二種免許状及び保育士資格に加えて養護教諭二種免許状を取得するカリキュラムとなっているが、入学前及び入学時のオリエンテーションでその意識を学生が適切に持てるよう教員側も働きかけを行わなければならないと実感している。

また、養護教諭の職務ひとつひとつについて詳細に学習していくものの、職務同士の関連やこれらを俯瞰できるほどのスキルはこの時点では十分にないため、養護教諭と保健室との関連性や保健室が健康情報の中心的な役割を担うことについては確かに捉えられていないものと想定される。これが、「みがく」－⑥（3.1 点）の項目に反映されたと考えられた。

上記ディプロマ・ポリシー達成度の値から、1 年次前期の達成目標について学生自身は十分達成できたものと実感していることがわかる。学生の意識としては十分な値と考えられるが、養護教諭について学習し始めたばかりで、養護教諭の職務や保健室の機能についておぼろげながら全景が見えてきた段階であり、実際にはまだ具体的な職務を的確には捉えられていないものと考えている。

◆１年次後期

【結果】

１年次後期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度を調査した結果、それぞれの目指す姿の平均値は、4 点満点中「きづく」3.2 点（80.3%）、「かかわる」3.2 点（80.4%）、「みがく」3.3 点（82.6%）であり、全体としては 3.2 点（79.6%）の達成度が示され、前期に比べると若干減少している。

「きづく」では、「②一人ひとりの特性や個性を把握することの重要性を理解している」で3.5点と高い値を示したが、「①養護教諭としての気づきを感じとり、様々な心身の状態や課題を捉え、養護診断を想定することができる」・「⑤こどもの心身の状態や課題を把握し、必要な情報をもとに養護診断ができる」の２項目で 3.1 点となった。

「かかわる」では、「⑨他者との関わりやコミュニケーションの基礎・基本を身につけている」（3.4 点）で最も高い値を示したが、「②健康相談・健康相談活動の内容と方法について理解し、基礎的な技術を身につけている」・「⑦学習指導要領を踏まえ、保健教育における養護教諭の役割を理解し、基礎的な知識・技術を身につけている」では 3.1 点とやや低い値となった。

「みがく」では、「②養護教諭として必要な資質・能力を身に付けるために、学ぶ意欲と志をもち、自ら学んでいる」・「③養護教諭になりたい、または、養護教諭の免許を有する保育者になりたいという強い意志を持っている」の２項目で3.4点という値を示したが、「②目指す養護教諭像または養護教諭の免許を有する保育者像に向けて自身の特長や課題にきづくことができる」においては３．２点と平均値には若干及ばない結果となった。

【成果と課題】

まず、「きづく」では、②（3.5 点）の結果から、前期から継続して、学生が子どもの特性や個性

の把握について意識及び重要視していることがわかる。反対に、今期の最大の学習事項である“養護診断”に関わる項目①・⑤が 3.1 点となっており、養護教諭として身体面のみならず心理面・社会面・生活習慣のアセスメントを行い、総合的に判断することの難しさを感じていることが垣間見える。

次に「かかわる」－⑨（3.4 点）、③（3.3 点）から、他者との関わり、特に、チーム学校としての重要性を認識できたのではないかと伺える。一方で、「きづく」の結果とも関連するが、養護教諭の職務のうち、健康相談活動や保健教育で消極的な値を示している。保健教育では、授業設計や指導案作成等の基礎的な学習をするが、授業内かつこの期間のみで、これらの内容を完全に修得するものではなく、現場での実習や今後の教員生活の中で研鑽していく内容であるため、養護教諭の専門性を磨くべく、今後の実習や実践経験も踏まえながら理論と実践とで往還的に修得することを期待する。

最後に、「みがく」では、②③⑨（3.4 点）の数値より、自分が目指す養護教諭像や高い意欲を持っていることがわかった。ただし、この段階で保健室が学校の健康情報の中心的な役割を担うことについては、まだ具体的なイメージがつきにくく、⑥（3.1 点）という結果になったものと考えられた。

ディプロマ・ポリシー達成度の値や上記のことから、この時期に修得すべきものについては概ねできたものと評価する。その一方で、１年次後期では、前期に学んだ養護教諭の職務について演習を通して学習体系を組んでいるが、演習や実践をする中で実体験として養護教諭の専門性について難しいと捉えているのではないかと推測する。学生自身がわかっていたつもりでもいざ実践してみると、わからないことがわかる、あるいは自分自身ができると思っていたにもかかわらず、やってみるとできないことがわかる、という経験をする時期であるため、体験的な学びを可能な限り取り入れながら、学生の理解度や実践力を高めていきたいと考える。

◆２年次前期

【結果】

２年次前期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度を調査した結果、それぞれの目指す姿の平均値は、4 点満点中「きづく」3.3 点（81.5%）、「かかわる」3.0 点（74.8%）、「みがく」3.5 点（86.5%）であり、全体的には 3.3 点（79.5%）と概ね良好な結果であるとともに、1 年次前期より若干ではあるものの上昇した結果となった。

まず、「きづく」に関連する項目では、③の項目において最も高い値（3.7 点）を示していることから、学生が個性を重視した教育の大切さ、個性を伸ばすことの大切さを十分に理解していると考えられる。これに関連する項目については、1 年次前後期を通して高い評価項目となっており、本学において建学の精神を反映した教育を実践できているものと思われる。また、多様性が重視される今日、一人ひとりの状態やニーズを把握するだけでなく、障がい者を理解することなどにも影響しているものと推測する。一方で、学校組織や校務分掌については 2.6 点と低い値を示しており、養護実習の経験を通して現場の仕組みが理解できていないことに気づいたと示唆された。

次に、「かかわる」－⑨（3.3 点）・③（3.2 点）の結果から、児童生徒への啓発活動や保健室に来室した児童生徒のニーズおよび対応の仕方について、現場で集団および個別の保健課題を把握

し、その働きかけができたと実感した学生が多かったことがわかった。反対に、⑩（2.6 点）、⑧（2.7 点）、⑦（2.8 点）は低い値を示しており、講義内で実習の振り返りをした際、実際に保健指導を実施してみて、保健指導の基礎的な知識および指導技術が不足していると感想を述べる学生も複数おり、大学で学習する内容は実習前に最低限定着させておく必要性を感じた。ただし、実習評価からもわかるように、実際には学生の実感する以上に実習校による評価は高いものであったため、学生自身がより自信を持てるよう事後指導をすることもあわせて考慮したい。

最後に「みがく」－④（3.8 点）、③・⑤（3.6 点）で高い値を示しており、養護実習への取組の姿勢や養護実習を通して養護教諭としての課題を発見することができたという結果が反映されており、3 週間の臨地での実習経験が学生にとって大きな学びの場となっていると言える。その反面、①については、2.9 点と最も低い値となっており、実習を通して初めて養護教諭の専門性を現実のものとして経験し、これからの自分自身の課題解決の模索レベルに到達していないように受け止めることができる。

【成果と課題】

以上の結果から、2 年前期の到達度を総合的に評価すると、３つのディプロマ・ポリシー（「きづく」「みがく」「かかわる」）の平均値はすべて 3.0 点以上あり、概ね達成できていると考える。

「きづく」では、③「一人ひとりの特性や個性を把握することの重要性を理解している」項目において最も高い値を示していることから、本学の建学の精神でもある個性を重視した教育の大切さ、個性を伸ばすことの大切さを学生が十分に理解していると考えられる。その結果、多様性が重視される今日、一人ひとりの状態やニーズを把握するだけでなく、障がい者を理解することなどにも関連して反映されているものと推測する。

「かかわる」では、児童生徒への啓発活動や保健室に来室した児童生徒のニーズおよび対応の仕方について高い結果が示されたことにより、実習において集団および個別の保健課題を把握し、その働きかけができたと実感した学生が多かったことがわかった。

あわせて、「みがく」でも養護実習への取組の姿勢や養護実習を通して養護教諭としての課題を発見することができたという結果が反映されており、3 週間の臨地での実習経験が学生にとって大きな学びの場となっていると言える。

反対に、現場での実習を通して学校組織や校務分掌について十分に理解していないと気づいた学生もおり、学校全体の組織や校務分掌の仕組みを可能な限り実習前に学習して臨ませたいと考える。他にも、講義内で実習の振り返りをした際、実際に保健指導を実施してみて、保健指導の基礎的な知識および指導技術が不足していると感想を述べる学生も複数おり、大学で学習する内容は実習前に最低限定着させておくことが必須であると実感するとともに、自分自身で様々なこと学んでいく主体性を感じた学生もいたことがわかった。ただし、実習評価からもわかるように、実際には学生の実感する以上に実習校による評価は高いものであったため、学生自身がより自信を持てるよう事後指導をする必要性があることが示唆された。

以上のことを通して、２年前期には「養護実習」という現場での実践的な学びの場が提供され、自分自身の養護教諭としての理解度・到達度や課題をより明確にできる時期であり、その成果が実習評価のそれぞれの項目数値に反映されていることがわかった。これに関連して、四期全体を通してみると、この時期の達成度が最も低くなっている。実習を経験することによって、自分自身の評

価についてメタ認知的な作用が働いていることが推測された。

２年次前期の課題として、自分自身の課題が何か見つけることはできたが、その課題を解決するための方法を発見するまでには至らないと感じている学生が一定数いることもわかった。これに対する方策としては、２年後期の「教職実践演習（養護）」の講義を中心に引き続き自己の課題として研鑽していけるよう、来年度に向けた養護教育検討会議において担当教員で授業設計について検討する。

◆２年次後期

【結果】

２年次後期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度を調査した結果、それぞれの目指す姿の平均値は、4 点満点中「きづく」3.5 点（87.3%）、「かかわる」3.2 点（80.4%）、「みがく」3.5 点（86.９%）であり、全体的には 3.4 点（84.3%）と良好な結果であるとともに、1 年次及び 2 年次前期より上昇した結果となった。2 年間の学びとしては、十分に達成できたものと考える。

「きづく」では、「③体罰をしない覚悟をもち、体罰によらない指導方法について理解している」（3.8 点）・「④保護者や地域等と連携・協働することの重要性を理解している」（3.7 点）で高い値を示したが、「①養護教諭としての基本的な知識・技術を習得し、養護教諭としての気づきを意識しながら、こどもの健康状態を判断することができる」の項目では 3.1 点にとどまった。

「かかわる」では、「①こどもの発育・発達やこどもを取り巻く環境の理解に努め、こどもの心身の状態を適切に判断し、必要に応じて関係者と連携しながら支援や保健指導をすることができる」・「②こどもの健康課題を把握し、解決に向けた支援・指導及び助言に関する内容と方法を理解している」・「⑤健康課題のあるこどもに対して、必要な情報をもとに関係者と連携しながら支援することができる」・「⑥個や集団を指導する手法（指示やほめ方・しかり方）を身につけている」の 4 項目で 3.3 点となり、「③家庭や地域の関係機関との連携（協働の方法）について提案することができる」・「④諸問題への組織的な対応の重要性を理解し、その手法を身につけている」・「⑦こどもの実態の把握に努めながら、学校保健委員会等の保健組織活動の活性化について方策を考案できる」では 3.1 点と評価が分かれた。

「みがく」では、「④養護教諭または保育者になる覚悟をもち、こどもを成長させよう、自立させようとする強い意欲を持っている」で 3.7 点と最も高い値を示し、「②養護教諭になりたい、または、養護教諭の免許を有する保育者になりたいという強い意志を持っている」についても 3.6 点と同様に高い値を維持した。その一方で、「①養護教諭または養護教諭の免許を有する保育者としての個性をみがくために、探求したいテーマ（生涯にわたる課題）を持つことができる」項目では３．２点とこのカテゴリー内ではやや低い値になっている。

【成果と課題】

2 年次後期は、養護実習を含むすべての実習を終え、免許必修に関わるすべての科目を履修することになる。教職科目の中には「教職実践演習（養護）」が設定され、養護教諭についての職務全般を統合する時期に匹敵する。

その中で、「きづく」－③・④の結果は、教員の資質とも言うべき、こどもの人権や権利を尊重

する方策を理解し、保護者をはじめとする他者との連携を重要視することができていることを示す結果であり、養成段階において十分に評価できる。

また、このような高い意識をもつ傍ら、養護教諭としてこどもの健康課題を捉える視点を持ち、その課題解決に向けた支援・指導及び助言に関する内容と方法を理解すること、個や集団に向けた指導方法を身につけていると感じていることは養護の本質に資することとも言えるため、学生が養護教諭の資質を十分に備えたと考えてよいものと思われる。

最後に、「みがく」－②・④の結果から、養護教諭の知識・技能を有する保育者を目指した 2 年間の学びの中で、学生はその強い意志を継続して努力したと感じていることがわかった。同時に、履修カルテの自由記述欄には「大変だったが、保育者としてのみならず、養護教諭としての視点を勉強することがためになった」や「子どもたちの健康や安全のために必要なことを学習できて、今後の現場で生かしていきたい」という記述が複数見られ、多様で複雑なカリキュラムの中でも学び得るものが多かったと評価している。ただし、「養護教諭または養護教諭の免許を有する保育者としての個性をみがくために、探求したいテーマ（生涯にわたる課題）を持つことができる」という主題については、今回の数値から詳細を読み取ることができず、また、養成校段階ではやや難しいものと思われるため、これから現場に出て自分自身の実践を通しながら研鑽を続けていくことを期待する。

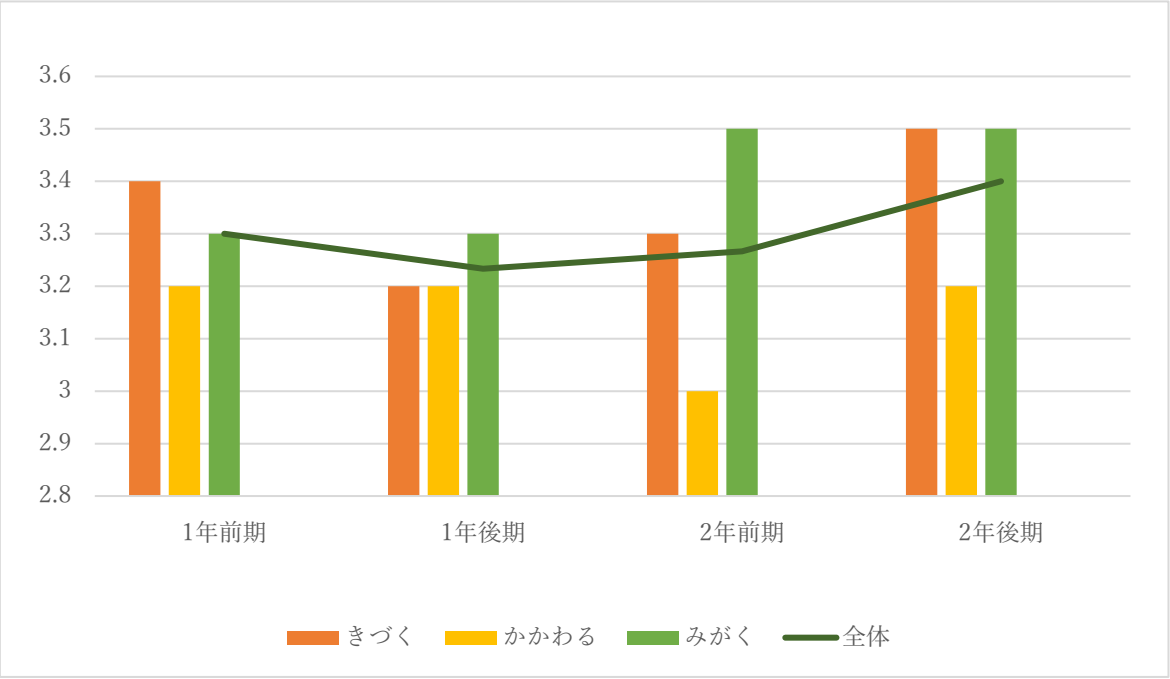

図 2　令和 5（2023）年度　学修成果（DP 達成度）推移

小学校コース　学修成果（ディプロマ・ポリシーの達成度）の成果と課題【22 年次生】

◆１年次前期

【結果】

1 年前期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」(3.1 点)「かかわる」(2.8 点)「みがく」(3.0 点) であった。

「きづく」では、最も高い項目は、「小学校学習指導要領の各教科等の目標、内容、指導事項、全体構造について知ることができる」(3.3 点) であり、次に、「こどもの視点に立った安全管理・危機管理について知ることができる」(3.1 点) であり、次に、「教育課程および教育指導計画の編成、評価に関する基礎理論・知識を理解することができる」(3.1 点) であり、最も、低い項目は、「こどもの権利や多様な個性を尊重する姿勢をもち、こどもの視点を想像しながら、様々なこどもの姿を感じとることができる」(3 点)であった。

「かかわる」では、最も高い項目は、「こどもの権利や多様な個性を尊重する姿勢をもち、こどもの視点を想像しながら、様々なこどもの姿を感じとることができる」(3.0 点)であり、次に「各教科等の教材分析の仕方を理解し、授業化する視点を身に付けることができる」(2.9 点)、「多文化共生と SDGs を理解し、取り組みを考える」(2.7 点)、「ICT に関わる基礎的技術を理解している」(2.7 点)であり、最も低い項目は、「カリキュラムマネジメント (PDCA) の基礎的な考え方を理解することができる」(2.8 点)であった。

「みがく」では、最も高い項目は、「挨拶，言葉遣い，服装，他の人への接し方など、社会人としての基本的な事項を身につけることができる」(3.1 点)、「教育者の役割を理解した上で、自身の目指す教育者像を描くことができる」(3.1 点)であり、次に、「自分の目指す教育者像を明らかにし、教育者になるための目標を決め、その手立てを見つけることができる」(3.1 点)、「保護者や地域との連携・協力の重要性を理解することができ、連携・協働する方法をイメージすることができる」(2.8 点)であり、最も低い項目は、「ICT に関して授業や校務に必要な操作方法及び授業活用能力育成の意義や効果を理解できる」(2.8 点)である。

【成果と課題】

1 年前期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」段階が 3.1 点、「かかわる」段階が 2.8 点、「みがく」段階が、3.0 点であり、概ね良好な値となっている。

「きづく」①では、最も自己評価が高く (3.3 点)、小学校学習指導要領の各教科等の目標、内容、指導事項、全体構造について知ることができていることが分かる。

「きづく」②③④については、こどもの視点に立った安全管理・危機管理について知ることができたり、教育課程および教育指導計画の編成、評価に関する基礎理論・知識を理解したり、他者と共同して、教育活動を企画・運営・展開することを知ったりすることができるようになっている。このことは、入学してからの初期段階から進んで、小学校教育についての専門的な学びが進んでいることが分かる。

「きづく」⑤については、最も低い評価となっている。このことは、前期の全科目の学びを通し

て、こども理解については、座学から、具体的な小学校教育実習という体験を通して深くなっていくことに気付いた学生が、今後の教育実習という体験を通して、こどもの権利や多様な個性を尊重する姿勢をもち、こどもの視点を想像しながら、様々なこどもの姿を感じとることができることを期待して、実習前の現状では、低く評価していることが伺える。

「かかわる」①⑤については、前期の科目履修により、こどもの発育・発達に応じた様々な教育活動・学習活動を考えることができるとの自己評価にもかかわらず、各教科等の教材分析の仕方を理解し、授業化する視点を身に付けることは、低い値となっていることが分かる。このことは、各教科等の指導法が後期に集中していることもあり、このカリキュラム配置の影響があると考えられる。

「かかわる」②③④については、多文化共生と SDGs を理解し、取り組みを考えたり、ICT に関わる基礎的技術を理解したりする学びは、継続的な取り組みの中で定着していくものであり、前期科目の履修だけで、終わりというものではないことを学生は自覚していることから、評価が低くなっていることが考えられる。

文部科学省の GIGA スクール構想では、全国の児童・生徒一人に一台のコンピューターと高速ネットワークを整備する取組が 5 年経過し、各小学校では、ICT 教育が推進され、タブレットや電子黒板を使用した授業が日常化している。この現状に対応できる教員を養成することが喫緊の課題である。学生のリテラシーを高める取り組みと ICT 活用の教育環境を整えるための機器導入・整備等が必要である。

また、カリキュラムマネジメント（PDCA）の基礎的な考え方を理解することについては、前期の学修により、全ての教育活動には、目標があり、目標達成については、PDCA サイクルで計画、実践、評価、改善を行うことが必要であることの理解は、後期の各教科等の指導法の学びを通して、指導案作成、発問板書計画作成、模擬授業を行い、振り返りをしながら、指導案を付加・修正すると言った一連の学びを履修することで、理解が深まると考えることが期待できる。

「みがく」①④⑤では、挨拶，言葉遣い，服装，他の人への接し方など、社会人としての基本的な事項を身につけることができることや教育者の役割を理解した上で、自身の目指す教育者像を描くことができることは、小学校教育に関わる教職課程を履修する中で、教師を目指したいという自覚が強くなり、自分の目指す教育者像を明らかにし、教育者になるための目標を決め、その手立てを見つけることができるようになってきていることが分かる。

「みがく」③については、保護者や地域との連携・協力の重要性を理解することができ、連携・協働する方法をイメージすることができるシラバスや教授内容の精査を行うことで評価が高まると考えられる。

「みがく」②については、ICT に関して授業や校務に必要な操作方法及び授業活用能力育成の意義や効果を理解できることは、前述の「かかわる」－③と同様に、継続的な取り組みの中で定着していくものであり、前期科目の履修だけで、終わりというものではないことを学生は自覚していることから、評価が低くなっていることが伺える。後期の各教科等の指導法とも連動しての ICT に関するリテラシー向上の学修となるよう、シラバスや教授内容の精査が必要である。

以上の結果から、1 年前期では、2 年前期に小学校教育実習に行くための内諾書依頼をする直前の自己評価であるので、実践的な小学校での教職の姿をイメージしての自己評価となっていると考えられる。1 年前期では、最も低い項目の「多文化共生と SDGs の理解」並びに「ICT に関わる基礎的

技術の理解」に課題意識を持っていることが分かる。

◆１年次後期

【結果】

1 年後期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」(3.2 点)「かかわる」(3.1 点)「みがく」(3.2 点) であった。

「きづく」では、高い項目は、「小学校学習指導要領の理念と内容を理解するとともに、指導法について考え、授業のイメージをもつことができる」 (3.2 点)、「協同して教育活動を企画・運営・展開する経験の中で、社会性や対人関係を構築する力をつけることができる」(3.2 点)、「個々のこどもの特性や状況に考慮した接し方の方法や対応する知識を習得することができる」(3.2 点)、「教育者としての気づきを感じとり、様々なこどもの姿を捉えることができる」(3.2 点) であり、次に、「情報教育機器の活用に係る基礎知識を活かして実践に活用する手立てを考えることができる」(3.1 点) であった。

「かかわる」では、最も高い項目は、「各教科等の学習指導案を作成し、発問・板書計画を作成して模擬授業をすることができる」(3.2 点)であり、次に「各教科等の指導法に係る基礎理論・知識を習得することができる」(3.1 点)、「授業展開の基盤となる授業技術を理解することができる」(3.1 点)、「教育活動の見通しを持ち、こどもの発育・発達に応じた指導・支援を考えることができる」(3.1 点)であり、最も低い項目は、「教育課程を理解し、授業中の個や集団を指導する方法を身に付けている」(3.0 点)であった。

「みがく」では、最も高い項目は、「他者の意見やアドバイスに耳を傾け、省察し、自らの課題に取り組むことができる」(3.3 点)、「目指す教育者像に向けて自身の特長や課題にきづくことができる」(3.3 点)であり、次に、「教育とは何かを理解し、教育者として成長するための課題をもつ」(3.2 点)、最も低い項目は、「学習評価、授業評価の意義と方法について理解し、自らの課題にきづくことができる」(3.1 点)である。

以上、各段階の全ての項目で、3 点以上の評価点となっている。

【成果と課題】

1 年後期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」段階が 3.2 点、「かかわる」段階が 3.1 点、「みがく」段階が、3.2 点であり、良好な値となっている。

「きづく」段階では、①②③⑤の項目で、評価点が、3.2 点となっており、「きづく」段階の教育者として気づきを感じとり、様々なこどもの姿を捉えることができていると判断できる。このことは、前期の学修を踏まえ、後期の各教科等の指導法を学び、具体的な教育活動の場における具体的なこどもの姿を具体的に捉えることができるようになったからであると判断できる。小学校教育についての専門的な学びが着実に進んでいることが分かる。

「かかわる」①②③⑤については、各教科等の学習指導案を作成し、発問、板書計画を作成して模擬授業を行ったことで、教育活動の見通しを持ち、こどもの実態に応じた指導、支援を考えることができるようになってきていることが分かる。各教科等の指導法を学んだことで、教材分析の仕方を理解し、授業化する視点を身につけることができていることが分かる。本学では、小学校の模

擬教室を使用しており、実際の現場の雰囲気のある教室で、授業を行うことで、臨場感が増し、学生は、2 年生前期で小学校教育実習を行うという目標があり、目標に向かって、真摯に取り組めた成果が評価点にも表れている。

「かかわる」④については、カリキュラムマネジメント（PDCA）の基礎的な考え方の理解については、後期の各教科等の指導法の学びを通して、指導案作成、発問板書計画作成、模擬授業を行い、振り返りをしながら、指導案を付加・修正すると言った一連のPDCAサイクルを履修することで、教育課程を理解し、授業中の個や集団を指導する方法を身に付けて、理解が少し深まったと判断できるが、教育課程の理解は、様々な科目履修を通して繰り返し指導していくことが必要である。

「みがく」①④については、入学してから一年間が経過し、様々な意見やアドバイスに耳を傾け、教職に就くという目指す教育者像について考えたり、省察したりする中で、自分の特長や課題に気づくことができていると判断できる。

このように、小学校教育に関わる教職課程を履修する中で、教師を目指したいという自覚が強くなり、自分の目指す教育者像を明らかにし、教育者になるための目標を決め、その手立てを見つけることができるようになってきていることが分かる。

◆２年次前期

【結果】

２年前期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」(3.3 点),「かかわる」(3.3 点),「みがく」(3.3 点)であった。

「きづく」では、最も高い項目は、「教職の意義や法令遵守の重要性を理解できる」(3.3 点)、「教育者としての気づきを意識しようとしながら、一人ひとりのこどもの姿を捉えることができる」(3.3 点)であり、次に、「学級や個の実態に応じた学習指導案を作成し、授業を展開することができる」(3.2 点)、「小学校における教諭の職務や学級経営について理解できる」(3.2 点)であり、最も低い項目は、「教育の理論と技術の往還的な体験を通じて、こども理解の視点から自分の強みや弱みを発見することができる」(2.8 点)となっている。

「かかわる」では、高い項目では、3 項目あり、「学級の実態に応じた学習指導案を作成し、授業を展開することができる」(3.2 点)、「教育評価の意義と方法を学び、一人一人の学習状況を把握する手段が理解できる」(3.2 点)、「指導計画や学習指導案を基に、こどもとかかわることができる」(3.2点)であり、次に、「教員の崇高な使命を理解し、志を立てることができる」(3.0点)、「学校組織や校務分掌とともに、学級担任の役割と職務内容を理解できる」(3.0 点)である。

「みがく」では、最も高い項目では、「教育の意義、目的、方法などを理解し、教育の意味や在り方について考え、教育者としての自己の強みや弱みについて考えることができる」(3.3 点)であり、次に、「道徳の理論および指導法とカリキュラムマネジメントについて理解できている」(3.2点)、「危機管理の重要性を理解し、危機発生時の対応について理解できている」(3.2 点)であり、最も低い項目は、「教育者としての自身の特長を伸ばす方法や課題を解決する方法を考えることができる」(2.8 点)である。

【成果と課題】

２年前期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」3.3 点、「かかわる」3.3 点、「みがく」3.3 点であった。概ね良好な値となっている。

「きづく」―①②④⑤では、教職の意義や法令遵守の重要性を理解でき、教育者としての気づきを意識しようとしながら、一人ひとりのこどもの姿を捉えることができている。また、これまでの理論と実践の往還により、学級や個の実態に応じた学習指導案を作成し、授業を展開することができたり、小学校における教諭の職務や学級経営について理解できたりしている。「きづく」―③については、2.8 点と低い評価である。教育の理論と実践の往還的な体験を通じて、こども理解の視点から自分の強みや弱みを発見することができることは、自らの実践を省察し、評価・改善していく上で重要であるが、それぞれの履修科目の授業の中で、例えば、学生自らが教材、教具を作っていく中で自らの強みや弱みを自覚できるような指導の工夫が必要である。この点の自己点検評価とシラバスによる計画的な実行を検討する必要がある。

「かかわる」―②③④⑤については、評価が高く、学校組織や校務分掌とともに、学級担任の役割と職務内容を理解できたり、学級の実態に応じた学習指導案を作成し、授業を展開することができたり、教育評価の意義と方法を学び、一人一人の学習状況を把握する手段が理解できたり、指導計画や学習指導案を基に、こどもとかかわることができたりすることができている。このことは、1 年前期で各教科等の教材研究を学び、1 年後期でその指導法を学び、2 年前期に小学校教育実習に行き、また、指導について学ぶという教育の理論と実践の往還の中で、その学びが深まり、定着していくことができたと言える。

「かかわる」―①について、教員の崇高な使命を理解し、志を立てることについては、小学校教員志望と保育者志望の学生がいるが、複数の保育実習や教育実習を通して、それぞれの立場で志を立てることができるように指導の充実がなされているために概ね良好な値となっている。

「みがく」―①②③では、教育の意義、目的、方法などを理解し、教育の意味や在り方について考え、教育者としての自己の強みや弱みについて考えることができたり、道徳の理論および指導法とカリキュラムマネジメントについて理解できたり、危機管理の重要性を理解し、危機発生時の対応について理解できたりが、小学校教育実習を経験することで、理論と実践の往還が可能となり、良い評価につながっている。

「みがく」―④については、教育者としての自身の特長を伸ばす方法や課題を解決する方法を考えることができることは、評価が 2.8 点と最も低かったが、教育実習により、気付いた自己の良さや弱みを今後の教職実践演習等の科目履修で良さを伸ばす方法や課題を解決する方法を考えられるような振り返りや省察の時間をそのシラバスに適宜取り入れることが重要となる。

以上の結果から、2 年前期では、小学校の教育実習を終えた直後であるために、小学校の教職を体験し、理論と実践が結びついて、理解が促進していることが自己評価からうかがえる。また、最も低い項目の「教育者としての自身の特長を伸ばす方法や課題を解決する方法を考えることができる」に課題意識を持っていることが分かる。

◆２年次後期

【結果】

２年後期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」(3.0 点)、「か

かわる」(2.8 点)、「みがく」(2.8 点)であった。

「きづく」では、最も高い項目は、「いじめ等の未然防止の在り方、特別支援教育、異文化理解、共生教育などについて、個々の特性や状況に応じた対応の方法を理解できている」(3.1 点)、次に、「特別活動と総合的な学習の時間の目的の違いや知識・技術を理解している」(3.0 点)、「教育者としての基本的な知識・技術を習得し、自身の気づきを意識しながら、こどもの多様性を理解することができる」(3.0 点)であり、次に「望ましい価値観・倫理観と判断力を身に付け、教育者としての責任を持った行動ができる（こどもに対する責務とは何かについて理解し、行動に移す方法を知っている)」(2.9 点)、最も低い項目は、「教職の意義や教育者の役割、職務内容について理解することができている」(2.8 点)となっている。

「かかわる」では、概ね低い評価となっている。「『個別の支援計画』『個別の指導計画』」を理解し、特別な配慮を必要とするこどもへの具体的な支援、個のニーズに応じた支援が理解できる。」(2.9 点)、「気軽にこどもや保護者と顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど親しみを持った態度で接することができる」(2.9 点)、「各教科等の授業で情報機器を活用する知識・技術が身についている」(2.9 点)であり、次に、「外国語を用いた授業を通して異文化理解と指導法について理解することができる」(2.8 点)であり、最も評価が低いのは、「こどもの発育・発達やこどもを取り巻く環境の理解に努めながら、指導計画の中で教育者として臨機応変にかかわることができる」(2.6 点)である。

「みがく」では、概ね低い評価となっている。「自己の課題を認識し、その解決に向けて、学び続ける姿勢を持つことができている」(2.9 点)、「教育に関する新たな課題に関心を持ち、自分なりに意見を持つことができている」(2.9 点)であり、次に、「学習評価の意義と方法について理解できる」(2.8 点)、「教育の意義、目的、方法などを理解し、教育の意味や在り方について考え、教育者としての生き方について考えることができる」(2.8 点)、「教育者としての個性をみがくために、探究したいテーマ（生涯にわたる課題）を持つことができる」(2.8 点)である。

【成果と課題】

２年後期終了時におけるディプロマ・ポリシーの達成度調査結果では、「きづく」3.0 点、「かかわる」2.8 点、「みがく」2.8 点であった。概ね低い評価点となっている。

「きづく」―①②では、望ましい価値観・倫理観と判断力を身に付け、教育者としての責任を持った行動ができる（こどもに対する責務とは何かについて理解し、行動に移す方法を知っている）ことや教職の意義や教育者の役割、職務内容について理解することができていることに自らの課題を感じていることが分かる。2 年生後期においては、教育実習を経験した学生は、その後の科目履修により、教育の理論と実践の往還的な体験を通じて、自分の課題に気づき、自らを省察し、評価した結果であると捉えることができる。

「かかわる」－①については、外国語活動の目標は、「外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニ　ケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。」ことである。日本と外国との生活，習慣，行事などの違いを知り，多様なものの見方や考え方があることに気付くことができるよう、外国の絵本を通して異文化理解に努めるなどの継続的な工夫が重要である。

「かかわる」―⑤については、全ての項目の中で、最も低い評価点であったが、「こどもの発

育・発達やこどもを取り巻く環境の理解に努めながら、指導計画の中で教育者として臨機応変にかかわることができることは、難しい課題である」と学生が自覚した結果であると考えられる。昨今、こどもを取り巻く環境は少子化、核家族化、デジタル化、グローバル化、価値観の多様化など、様々な社会的背景によって大きく変化している。また、近年はこどもの不登校や自殺が増加傾向にあり、虐待、こどもの貧困についても増加傾向にある。教育現場を教育実習で体験した学生は、生徒指導、教育相談の難しさを深く考えることができてきて、自らの課題と判断したと窺える。

「みがく」②⑤については、「教育の意義、目的、方法などを理解し、教育の意味や在り方について考え、教育者としての生き方について考えることができる」ことと、「教育者としての個性をみがくために、探究したいテーマ（生涯にわたる課題）を持つことができる」ことは、本学での小学校教職課程を修了する上で、また、自信を持って小学校の教育現場へ送り出すうえで、重要な内容であるが、実際に、小学校へ就職する学生は、三分の一程度であり、保育士等を目指すものもいる。卒業、就職をまじかに控えた学生では、進路が分かれるために、小学校コースの学生としての評価が低くなっているのではと考える。

改善点としては、後期履修の「教職実践演習」等の中で、教育実習中に気付いた自己の良さや課題について、良さは更に伸ばす観点から、課題は改善する観点から、具体的な教育現場を想定した演習の工夫や実践的な課題を解決する方法を考えていく振り返りや省察の時間の工夫により「教育の意義、目的、方法などを理解し、教育の意味や在り方について考え、教育者としての生き方について考えることができる」ことと、「教育者としての個性をみがくために、探究したいテーマ（生涯にわたる課題）を持つことができる」ことの指導を今後も充実させていく。

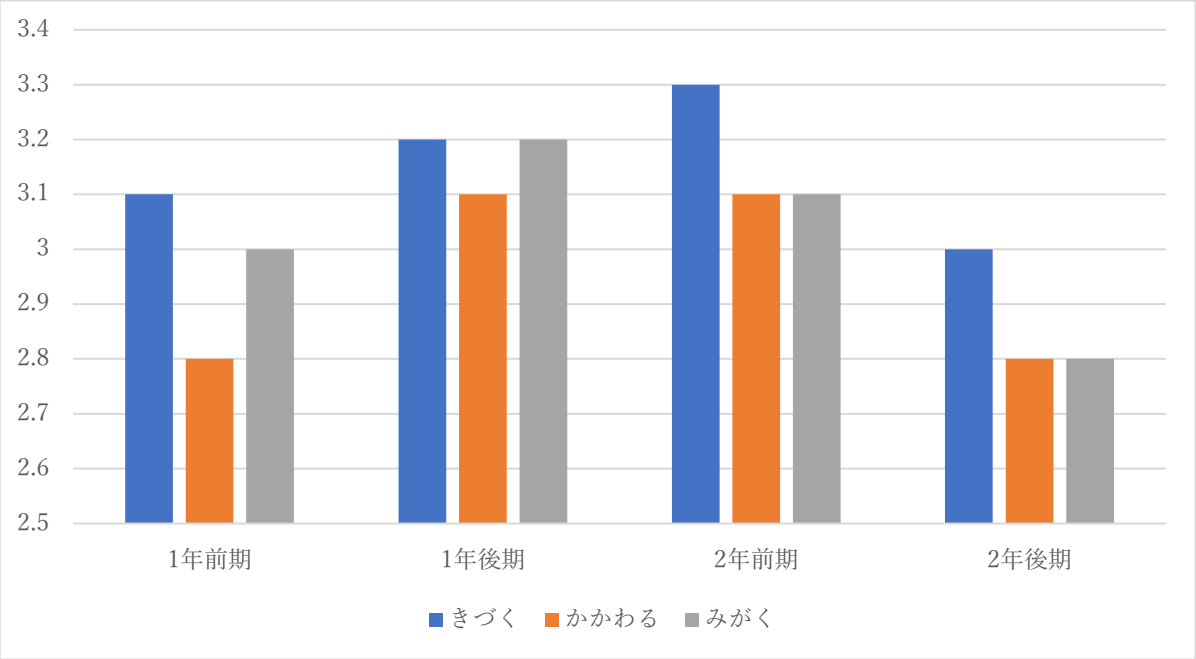

図３　令和５（2023）年度　学修成果(DP 達成度)推移